

ワールドカップ審判を輩出しているアメリカのサッカー審判員育成策

Factors in the U.S. Soccer Referee Training System's

success factors of producing World Cup referees.

スポーツビジネス研究領域

5021A020-2 小林 拓矢

研究指導員：平田 竹男 教授

1.背景

サッカー審判員のライセンス制度は、各国 FA が定めるライセンス制度と FIFA が定める FIFA ライセンス制度がある。J リーグ等の国内リーグは各国 FA が定めるライセンスを取得した審判員が担当可能だが、国際大会を担当するためには各国 FA から推薦を得て FIFA ライセンスを取得する必要がある、FIFA W 杯を担当するためには国際試合等での評価を元に FIFA に選出される必要がある。

2002 年から 22 年までの W 杯において、ラウンド 16 以降のレフェリーを地域ごとにみると、欧州 45、南米 24、北米 14、アジア 10、アフリカ 3 となっている。欧州南米以外でラウンド 16 以降に連続で輩出している国は表 1 の 4 ヶ国となっていた。米国は 14 年大会で初めてラウンド 16 以降に輩出し、18 年、22 年と 3 大会連続で輩出していた。米国が 3 大会連続でレフェリーを輩出できた背景には Professional Referee Organization(以下プロ審判機構)の設立が考えられるが、USSF との役割の違いや具体的な育成策は明らかにされていない。

表 1 欧州南米以外でラウンド 16 以降にレフェリーを連続で輩出した国

	02年	06年	10年	14年	18年	22年
メキシコ	○	○	○	○	○	○
アメリカ	—	—	—	○	○	○
日本	—	○	○	—	—	—
ウズベキスタン	—	—	○	○	—	—

サッカー審判の制度に関する研究として、ドイツのサッカー審判員の実情をまとめた上野(2018)や、日本のサッカー審判員育成システムをまとめた青山(2015)が挙げられる。また、イングランド FA のサッカー審判員育成制度を調査した Webb ら(2021)が挙げられる。しかし、近年トップ審判員を輩出している米国の審判ライセンス制度や育成システムに関する研究は行われていない。

2.目的

本研究は、米国のサッカー審判員のライセンス制度と審判員の育成策について明らかにすることで、米国の W 杯担当審判員を輩出している要因を示すことを目的とする

3.研究方法

1)文献調査

USSF、各州サッカー連盟及び、プロ審判機構の公式ホームページ、関連文献から審判制度に関する情報を取得し、ライセンス制度、受験資格、評価項目、担当可能試合等の調査を行なった。

2)インタビュー調査

MLS 担当主審である A 氏と B 氏及び、プロ審判機構で審判アセッサーを務める C 氏に対して、プロ審判機構での活動や、トップレフェリーの育成環境等に関する調査を行なった。

4.結果

1)米国サッカー審判員の現状

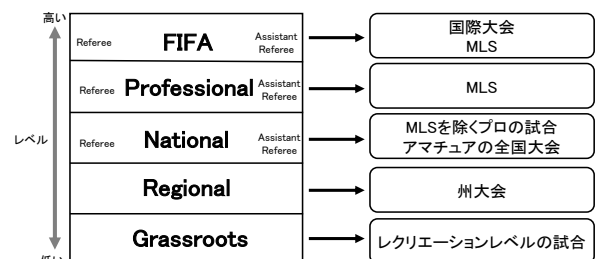
審判のカテゴリーは、Grassroots、Regional、National、Professional、FIFA の 5 段階に分かれていた。Grassroots は小規模またはレクリエーションレベルのユース及び、アマチュアの試合、Regional は州大会、地域イベント、NPSL や USL2 部などのプロリーグの試合、National は

MLS を除くすべての国内及び、プロの試合、Professional は MLS を含むすべての国内大会や特定の国際試合、FIFA はすべての国内試合とすべての国際試合を担当することが可能となっていた。Grassroots、Regional、National は USSF が統括し、Professional はプロ審判機構によって統括され、FIFA は USSF の推薦で FIFA が認定をしていた。

2)ライセンスパスウェイ

米国のサッカー審判員のライセンスパスウェイをまとめた。(表 2)受験資格は Grassroots では 13 歳以上、Regional は 18 歳以上で Grassroots 取得後 3 年以上及び、アマチュアレベルの試合経験が求められていた。National では、Regional 取得後 2 年以上及び、アマチュア成人レベルの試合経験が求められており、受験時に自身でレフェリーまたはアシスタントレフェリーのいずれかを選択し受験する形式となっていた。Professional では、National 取得後 2 年以上、プロレベルの試合経験が求められており、FIFA では MLS を担当して 2 年以上という条件があった。試験内容は、研修での評価、競技規則テスト・フィットネステスト、実技試験となっていた。その他の条件として、不適切な指導撲滅を目的とした講義と安全で健康なプレー環境の提供を目的とした講義の受講が必要とであり、18 歳以上の審判員はバックグラウンドチェックも必要となっていた。

表 2 ライセンスパスウェイ



3)プロ審判機構について

プロ審判機構は 2012 年 11 月に USSF と MLS が共同で設立した。22 年時点のゼネラルマネージャーは 10 年 W 杯で決勝戦も担当した英国のハワード・ウェブ氏、審判員指導のトップは 14 年、18 年の W 杯 2 大会でレフェリー経験のある米国のマーク・ガイガー氏が務め、22 年の収入は約 20 億円だった。また、MLS 担当審判員のいるカナダの審判員養成も行なっていた。

プロ審判機構には、本部と支部があり、本部(PRO と言われることが多い)の活動目的は「より若い年齢でレベルの高い審判員を育成し、国際大会で米国とカナダを代表する審判員を生み出すこと」とされており、MLS 担当審判員の育成、及び審判員派遣を行っていた。支部(PRO2 と言われることが多い)の活動目的は「MLS に昇格する審判員を養成すること」と、「NWSL、MLS Next Pro、USL-championship、USL 1 を担当する審判員を発掘・育成すること」となっていた。

4)プロ審判機構の審判員育成

プロ審判機構における育成カテゴリーをまとめた。(表 3)本部では MLS を担当する BU、育成を担う支部においては Tier A、Tier B、Tier C、Assigning Pool、Non-BU と計 6 つののカテゴリーで育成を行っていた。また、USSF では National を未取得だとしても、プロ審判機構のスカウト

担当者により将来性があると認められれば、Non BU に所属し支部で育成を受ける機会が与えられていた。また、BU 以外の審判員には試合の評価を行うアセッサの派遣だけでなく、審判コーチも派遣されていた。支部での昇降格は1シーズンに2回、フィットネステストや試合での評価などを考慮した総合評価を元に支部のスタッフとコーチで協議が行われ、昇降格が実施されていた。BU への昇格は主に MLS での審査試合の評価を元に決定されていた。

表3 プロ審判機構における育成カテゴリー

育成機関	カテゴリー	主な担当試合
本部	BU	W杯を含む国際試合 MLS(国内)
	Tier A	MLSでのトライアルマッチ、 MLSの4th、USLC*、NWSL*
支部	Tier B	MLSの4th、USLC*、NWSL*
	Tier C	MLSの4th、USLC、 NWSL、USL-1
	Assigning Pool	NWSL、USL-1、USL-C
	Non-BU	USL-Cでのトライアルマッチ USL-1

注釈(*はダービーや順位決定などの注目度の高い試合を担当していることを表す)

5)審判員へのインタビュー

MLS 担当審判員 B 氏は、プロ審判機構の育成の特徴として支部所属審判員に育成コーチが付き課題の改善やストロングポイントの強化などに継続的に励むことのできる環境が整っていることや、審判員が少人数でグループ化され審判員同士の意見交換等も可能であることが示された。また、MLS アセッサの C 氏は、本部は MLS、支部はそれ以外の派遣リーグからの予算があることを特徴として挙げ、審判員やアセッサ、コーチに対する教材も豊富に用意されることや、評価についても減点方式ではなく、審判員の課題を見つけ、解決策を提示するような考え方で指導されている事がわかった。また、育成ではそれぞれのレベルに合わせた試合を担当できるようカテゴリー分けされており、毎試合に審判アセッサが派遣されていた。また、プロ審判機構では USSF とは異なる評価方法を採用し、判定、プレイヤーマネジメント、ゲームマネジメント、チームワーク、ポジショニング、動きの6項目で評価され、総合点は4点満点となっていた。この評価点は3.0以上で良いとされ、基本的には2.8から3.3の間の点数になる。評価点に幅が出るため、差がわかりやすくなっており、審判コーチによる指導やカテゴリー編成に有効活用されている事が示された。審判コーチの指導では、毎月担当審判員の試合へコーチを派遣することや、アセッサが登録したレポートを元にしたオンラインでの指導の場を設けることで、審判員の課題発見だけでなく改善やストロングポイントの強化等に継続的に取組むことのできる環境が整備されていることがわかった。

5.考察

1) USSF とプロ審判機構の関係

米国の審判制度の特徴として、USSF がグラス・ルーツから MLS 等のプロリーグを除く国内リーグ担当審判員の養成を行っており、プロ審判機構は MLS を含むプロリーグ及び、国際大会の担当審判員を養成する棲み分けがされていることである。USSF では普及とトップ以外の試合を担当可能な審判員の養成や派遣を州や各地域と連携しながら行っており、できるだけ多くの審判員を養成するなど、普及的な位置付けであることが考えられる。一方、プロ審判機構の設立が2012年であり、活動目的が「国際大会で活躍する審判員の輩出」と掲げているように、トップ審判員の育成に特化した位置付けであることが考えられる。米国が W 杯に3大会連続でラウンド16を担当する審判員を輩出できているのはプロ審判機構の審判員育成の成果の現

れであると言える。日本にも地域レフェリーアカデミー(旧 JFA レフェリーカレッジ)という審判育成制度があるが、主に若手を対象に1級ライセンス取得候補者である2級プールまでの育成を主としていることもふまえると、プロ審判機構における育成が FIFA を目指した育成制度であることは特筆すべき点と言える。(表4)

表4 日本におけるカテゴリーと育成過程

日本		アメリカ	
カテゴリー	主な担当試合	カテゴリー	主な担当試合
FIFA	FIFA	FIFA	FIFA
1級 J1担当	J1	PRO BU	MLS
1級 J2担当	J2	Tier A	審査試合(MLS) USL-C*、NWSL*
1級 J3担当	J3	Tier B	USL-C*、NWSL*
1級 JFL担当	JFL	Tier C	USL-C、NWSL USL1
1級 NC	U-18 プレミアリーグ	Assigning Pool	NWSL、USL1
2級 プール	審査試合(JFL割当) 地域リーグ	Non-BU	審査試合(PRO割当) USL1
2級	地域リーグ		

2)プロ審判機構のタレント発掘と育成

プロ審判機構の審判員発掘の特徴として、USSF では Grassroots だとしてもプロ審判機構のスカウト担当者が将来有望であるとすれば、Non-BU に所属し育成の機会を得ることのできる審判員発掘制度がある。この制度により、若いうちからトップ審判員を目指すことができ、トップ審判員候補者のタレントプール形成を可能にしていると考えられる。一方、日本では1級受験のためには地域協会からの推薦が必要であり、地域協会で実績を積み上げる必要があるため、将来性があったとしても数年間同じカテゴリーに在籍するケースもある。

プロ審判機構における育成の特徴は、米国型リーグ構造にはないカテゴリーを形成し、6つの育成カテゴリーでの段階的な育成過程があることや、独自の評価方法の採用、支部所属審判員に審判コーチを付けることで、継続的に育成している点が挙げられる。このように段階的かつ継続的な育成環境を整備したことで、審判員のレベルアップに繋がったと考えられる。日本における育成では、試合後にアセッサからのフィードバックを受ける機会はあるが、決まった人が継続的に指導しているわけではないため、長期的な視点での課題発見や改善などは審判員自身が行っていく必要がある。

これら2つの取り組みにより、米国がより若い年齢でレベルの高い審判員養成を実現したことに繋がったと予想される。

3)プロ審判機構の成長

プロ審判機構は審判派遣を主たる事業とする民間企業であり、本部は MLS、支部は NWSL、MLS Next Pro、USL-C、USL 1 を担当する審判員の育成及び、派遣や、スポンサーシップ等の収入を上げることで、USSF からの予算だけに依存せずに活動できることも特徴であると言える。本部は今後 MLS がエクспанションすること、メキシコも含めたリーグに拡大することが予想され、MLS の拡大とともに本部の収益の増加が予想される。支部に関しても、MLS の拡大に伴う米国におけるサッカー人気の高まりと共に事業拡大が予想され、MLS 担当審判員を含む米国の審判員のレベル向上が予想される。このようにプロ審判機構における育成の成果として、今後も継続的にトップ審判員を世界へ輩出する事が予想される。

6.結論

米国のトップ審判員育成では、国際大会に審判員を輩出することを目的とし、USSF とは別に独立したプロ審判機構という組織において、トップ審判員を育成するための独自の評価制度やコーチ制度、研修等が行われていた。その取組みが、W 杯審判員を輩出できた要因であると考えた。